主日の福音 2025/12/21(No.1388)

待降節第 4 主日（マタイ 1:18-24）

恐れず、受け入れなさい

「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」（1・20）実は同じ朗読箇所が先週の木曜日に選ばれていて、一度取り上げた箇所をどう違うように説教をしようか、悩んだのですが、木曜日からは少しは広がりがあるので辛抱して聞いてほしいです。

ヨセフにとって婚約者のマリアを妻として迎え入れるのは、困難なことでした。「二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていた」この事実があるからです。「聖霊によって宿ったのである」という天使の説明を聞いても、「なるほどね。それなら安心」となるわけがありません。妻として迎え入れても、彼女をどうやって人々の好奇心や非難から守ってあげればよいのか。大いに悩んだことでしょう。悩んだ挙げ句、ひそかに縁を切ろうと決心までしたのです。

私も、小神学校の最終学年の時に「神学校と縁を切ろう」と考え、実際に行動したことがありました。高校三年生として、生徒会長と一緒に生徒を束ね、導いていかなければと思ってはいるのですが、下級生たちは言うことをあまり聞いてくれません。

努力が徒労に終わってしまうと、誰でもやる気を失ってしまいます。私は当時の校長であった小島栄神父様に、「自分は続けていく気力を失いました。神学校を辞めます。99％帰ってくる気はありません」と言って、学期の途中で勝手に神学校を飛び出して、自宅に帰ったのです。

私が小島校長神父様にそのことを告げた時、小島神父様はこう言いました。「そうね。99％戻る気はなかとね。でも私は、残りの 1％に賭けてみるよ。」それから自宅に帰って神学校を辞めると伝えると両親はがっかりし、父親は涙を流していました。当時の鯛ノ浦教会には主任の熊谷（くまだに）神父様と助任の山脇神父様がいましたが、山脇神父様が身体を張って説得してくださり、私はまた神学校に戻ることにしました。しかし神学校はすでに「中田先輩は辞める」その噂で持ちきりになっていたので、残りの日々は針のむしろにいるような気分でした。

しかし、受け入れられない環境を受け入れて福岡の大神学校に入学した時、一年先輩の山村神父様から、「中田のために、葛嶋神父様がどれだけ心配していたか、お前は知らないだろう。戻ってきてくれるように祈っていたんだぞ」と言われ、私は自分で神学校を飛び出して、自分で神学校に戻ったと考えていたけれども、多くの人を通して、神様が支え、導いてくださっていたんだなと初めて知ることができました。

「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。」ヨセフにとっては、とても受け入れられない状況でした。マリアの顔に、「神が共にいてくださるから恐れないで」と書いてあるわけでもありません。それでも、マリアを妻として迎え入れました。そして神様の導きが決して離れずに留まることを、生まれてくるイエス様を通して示してくださ

いました。

私たちは今日、このヨセフの模範を自分自身の模範とするよう求められています。たとえば、私たちがカトリックの信仰を受け入れること、それはヨセフの模範に倣うことになります。「恐れずに受け入れなさい。」この季節ですから、イエスの誕生を受け入れることが、カトリックの信仰を受け入れる一つの形になります。イエスは「インマヌエル」「神は我々と共におられる」というお方です。

時に、カトリックの信仰があなたの生活の重荷に感じられることがあるかもしれません。なぜ私たちは、日曜日をミサに費やさなければならないのか。日々の祈りが求められ、ときどき罪を告白してゆるしを得なさい、堅信も受けなさい、結婚式も教会でしなさいと、周りの人と比べると何とも束縛されていると感じるかもしれません。

しかし、これらを恐れずに受け入れるなら、「神は我々と共におられる」ということを必ず体験させてくださるのです。病院や老人施設で、こう言われたことがあります。「教会はよかですね。私たちは家族がいてもめったに会いに来てくれませんが、教会の人は定期的に神父さんが来てくれる。」自分が弱って、共にいてくれる体験が欲しい時にカトリックの人たちが見舞いを受けているのを見て、そのように言ってくださったのでしょう。

恐れずに、受け入れる。もうすぐ神の御子はおいでになります。その瞬間を受け入れるだけでなく、神の御子を通して示される一つひとつの出来事を受け入れていきます。恐れずに受け入れる準備が必要です。恐れずに受け入れたなら、どこにいても「イエスは私たちの救いのためにおいでになった方です」と態度や言葉に表せる人になるでしょう。恐れずに受け入れる人は、幼子イエスを見守るもう一人の養父になります。

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）